

イタチハギ (別名：クロバナエンジュ)

科名：マメ科
学名：Amorpha fruticosa
原産地域：北アメリカ

【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐

- ・早い成長と強い萌芽力による繁茂により在来植物を駆逐する
- ・優占する状態が長期間継続する

産 業：果樹への被害

- ・リンゴ炭疽病を媒介し、リンゴやナシ等への感染源となる

生 活：洪水時の水流障害

- ・高水敷や中州、堤防法面等に繁茂し、根が浅く倒れやすいため、洪水時の流木化と堤防の弱体化を招く



高さ1～3mになる落葉低木

【生育場所】

- ・海岸や河原の裸地、道端、崩壊地等のほか自然度の高い亜高山地帯にも侵入
- ・緑化用植物として利用されてきたため、道路法面等が多い



花がついていない時期のもの

- ・葉は長さ15～30cmの奇数羽状複葉
- ・小葉は6～15対で卵形～長楕円形
- ・葉の裏に腺点がある

- ・開花は5～7月
- ・茎の先に長さ6～20cmの穂状花序を3～5個つける

【どこまで広がっているか】

長野県では

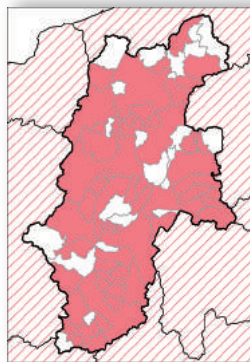
- ・県内に広く野生化

全国では

- ・大正時代に観賞用として渡来
- ・第二次大戦後、砂防・緑化用に導入されたものが広がっているとされる
- ・現在は、全国各地で野生化

世界の分布

- ・アジア、ヨーロッパ等（温帯域）



2019年現在
■ 定着 ■ 一部地域に定着



- ・花の長さ5～7mm
- ・黒紫色の蝶形花で、多数が密生

- ・果期は9～10月
- ・果実の長さ5～8mm
- ・種子を1～2個含む

- ・扁平な狭楕円体で表面にいぼ状の突起あり

【間違わないで！】

主な類似植物（在来種）

クララ（マメ科）



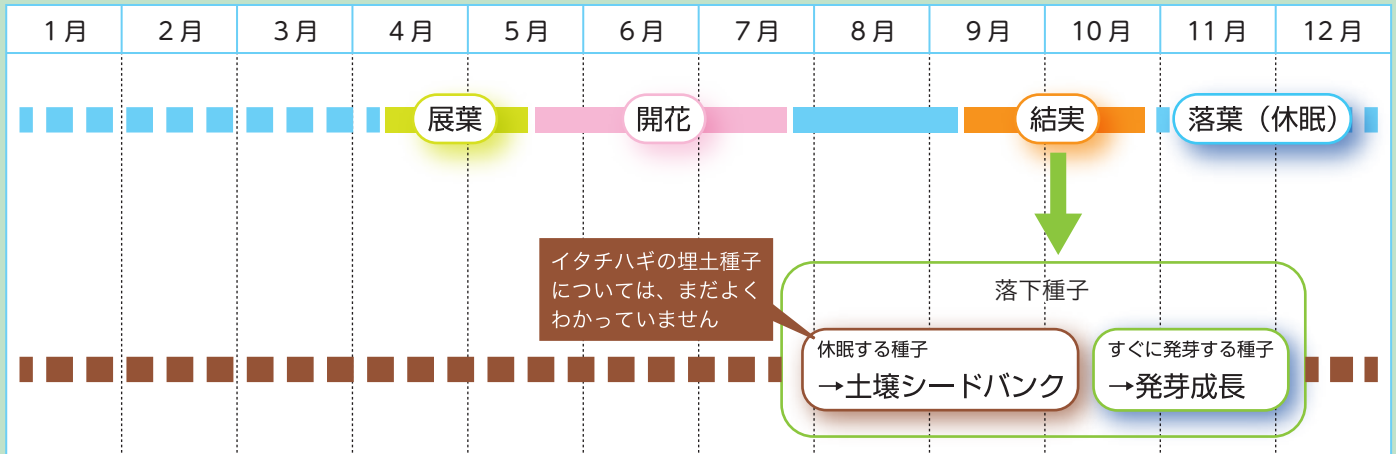
オオルリシジミの幼虫が食べる植物

- ・高さ80～150cmの多年生草本
- ・茎の基部は木質化する
- ・葉は奇数羽状複葉
- ・小葉は7～20対
- ・葉の裏に腺点はない
- ・6～7月、淡黄色の花を茎の先に穂状につける
- ・細い長さや状の形をした果実(豆果)には4～5個の種子がある

【特性】

- ・日当たりの良い場所に多く見られるが、耐陰性があり暗い場所でも生育できる
- ・耐暑性、耐寒性があるほか、水没にも強い
- ・萌芽力があり、成長が早い
- ・長期にわたって優占する
- ・窒素固定するバクテリアと根で共生し、やせた土壌でも旺盛に成長
- ・窒素をたくさん含んだ葉を落とすことにより土壌が富栄養化する
- ・種子は1週間以上水に浮き、遠くまで移動する
- ・種子の発芽はよく、休眠種子も発生するとされる

【生活史】

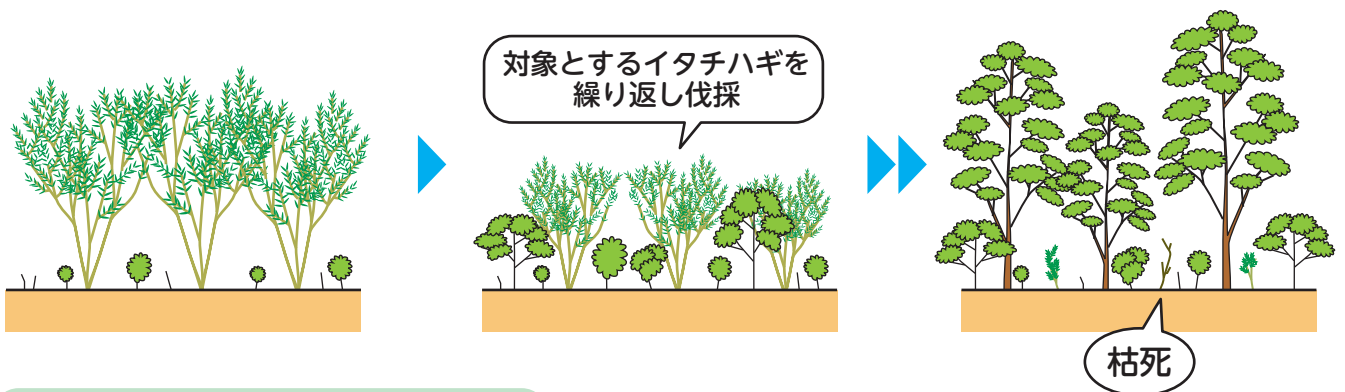


【防除方法】

伐採 他の木を育てて弱らせる

複数年かけて他の樹種の成長をうながし、イタチハギを日陰にすることで樹勢を弱めて小型化させる

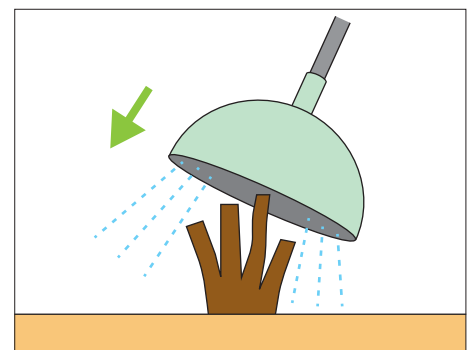
- チェーンソーやのこぎり、小木の場合は刈払機等により伐採する
- 年に1回以上（種子生産を抑えるため、1回は6～7月の結実前に実施する）、複数年実施する
 - ※伐採しても株（根）は生きているため、年1回の伐採では、切株からたくさんの萌芽（ひこばえ）が発生し、樹勢は弱まらない
 - ※伐採後、イタチハギ以外の樹種が生育していない場合は、対象地の立地環境に適した地域由来の樹木を植栽することが望まれる



伐採 + 除草剤 樹勢を弱めて根絶する

伐採に加え除草剤を用いることで、樹勢を弱めて根絶する

- 伐採直後、グリホサート系除草剤の原液または2倍希釈液を切株の切断面（主に辺材から形成層）にハケ等を用いて十分に塗布する
 - ※除草剤を使用することにより伐採回数を減らす等、手間とコスト削減が期待できる
- 低木性の樹木であり、切株（断面）は小さく、複数の切り株が集まった状態となるため、散布機の先にと状のカバーを取り付け、イタチハギの切株を集中的に（他の植物にかからないように）散布する方法も有効
 - ※除草剤は「登録農薬」^{※1}を使用すること
 - ※水源の周辺や上流では、除草剤は使用しない



ろうと状のカバーでイタチハギの切株を覆う

※1：登録農薬…効力、安全性、毒性、残留性等に関する試験成績を提出して審査を受け、行政庁（農林水産大臣）の承諾を取得したもの。登録された農薬は、安全・適正な使用方法が薬剤ごと、対象作物ごとに登録時に決められています。除草剤等の農薬については適切な利用が求められます。